

第3章 カレン世界

第4節 民俗・芸能（35枚）

1. カレン人の民族衣装

ミャンマーに住むほとんどのカレン系民族は貫頭衣を伝統的民族衣装としている。貫頭衣とは、袋状の布に頭と腕を通す穴を開けたような形態をした衣服である。狭義のカレン人とされるスゴー・カレンとポー・カレンの民族衣装も例外ではない。また、見かけはカレンの衣装とかなり異質に見えるパオ人の衣装も貫頭衣である。貫頭衣のことをスゴー・カレン語ではセー[shé]、東部ポー・カレン語ではチャイン[châin]、西部ポー・カレン語ではパロウ[pəlou?]と呼ぶ。スゴー・カレン語と東部ポー・カレン語の形は子音・母音・声調の対応が規則的であり、明らかに同源語である。いっぽう、西部ポー・カレン語の形は、シャツを表すモン語「パロツ」[paʔloʔ]の借用語だと思われる。以下では、単に「カレン人」という場合、スゴー・カレンとポー・カレンを指すことにする。

カレン人の貫頭衣には大きく分けて二つの種類がある。一つは上半身を覆うだけの丈の短いもの、もう一つは全身を覆う丈の長いものである。丈の長いものは、幼児および未婚の女性が着るのが伝統的習慣とされている。丈の長いもののうち特に純白のものは未婚の女性の象徴とされることがある。幼児や未婚女性以外は、丈の短いものを上半身にまとい、下半身には腰布（ロンジー）をまとう。このうち既婚女性は、未婚女性とは対照的に濃い色の貫頭衣を着る。男性はより古くは下半身に腰布ではなく黒いだぶだぶのズボンを着ていた。男性が黒いズボンを着る習慣は、ミャンマーのカレン人ではかなりすたれてきているが、タイ側の山地に住むカレン人にはいまだに残っている。ミャンマー側でも、カレン州北部からカヤー州およびシャン州南部にかけての山地帯に住むカレン系少数部族の男性は、今なお黒いズボンを着ている。



図1：カレン人の母子。子供が来ているのが長い貫頭衣、母親が来ているのが

短い貫頭衣。(カレン州の山地で)

今述べたのはあくまでも伝統的な服装である。現在、山地に住むカレン人の場合は貫頭衣を日常的に着ている場合も少なくないけれども、ミャンマーにおいてカレン人口の大半を占める平地のカレン人の場合、都市部に住むビルマ人とまったく同じような服装をしており、服装を見ただけではカレン人とは分からない。またヤンゴンなどの都市部ではカレンの貫頭衣を着ることが一種のファッションと捉えられることもあり、カレン服を着ているからといってカレン人だとは限らない。

カレン人の民族衣装は、伝統的にはビルマ語でジャッコウツと呼ばれる形態の織機で織られる。座って背中に紐をかけて糸を張る方式の織機である。この伝統は現在の平地のカレン人にはあまり残っておらず、機械織りの民族衣装が多く出回っているのが現状である。



図2：ジャッコウツで機を織る年輩女性

2. カレン人の民族芸能

カレン人の民族芸能の中で特筆すべきは、カレン州に住むポー・カレンの人々が踊るドン・ダンスという民族舞踊であろう。ドンというのはビルマ語の呼び名で、東部ポー・カレン語ではトウン[tōUN]と言う。

この踊りは非常に魅力的である。太鼓、銅鑼、シンバル、打ち竹などが刻む激しいリズムにのって、最大で男16人、女16人、総勢32人が、歌を歌いながら踊る。踊り手は、左右の足で交互にジャンプしながら移動を繰り返し、幾何

学的な隊列を次々に作っていく。歌の旋律は琉球の伝統歌謡に似ていることが多い。踊りの時間は短くても 15 分、長ければ 30 分にもおよぶ。激しい動きをこれだけの長時間、しかも歌いながら続けなければならないので、若い人でなければなかなか踊れない。30 才を越えると踊りに加わるのは難しいとも言われている。この舞踊の魅力は、踊りそのものの動きの激しさやユニークさ、隊列の面白さ、エキゾチックな旋律、微妙な速度の変化、腹に響く鳴り物の振動、歌の合間に聞こえるフネー（ミャンマーの伝統的管楽器。椰子の葉で作ったリードを付けて吹く）の美しい高音、などなど、挙げればきりがなし。右足が前に出たときには右手が前に出るというように同じ側の手足が同時に前に出されることや、鳴り物が激しいこと、隊列を組みながら踊ることなど、阿波踊りと共通する点が多いため、ドン・ダンスを知る日本人の中には、ミャンマーの阿波踊りなどと呼ぶ人もいる。

ドン・ダンスは何かの祭があるたびに踊られる。最も盛大に踊られるのは、毎年 11 月 7 日のカレン州記念日から数日にわたって開かれるドン・コンテストにおいてである。このコンテストは 1960 年代の半ばから毎年開催されるようになった。

私は 2000 年のカレン州記念日にちょうどカレン州を訪れる機会を得て、このコンテストを見に行くことができた。このときは、カレン州全土から 20 チームの舞踊団が集まった。コンテストは、11 月 7 日から 4 日間にわたり、每晚 7 時から深夜 12 時ごろまで行われた。まずは二つのグループに分け、それぞれのグループで点数が高かった舞踊団をもう一度競わせるので、時間がかかる。この年、前評判が高かったのは、パアンから 40 キロほど北東に行ったところにあるフラインボエという町の代表、パアンから 80 キロほど南東に行ったところにあるコーカレイという町の代表、パアンの選抜チーム「ミョードー」、パアン郊外にあるフラカミンという村の代表、の 4 グループだった。結果は、フラカミン村が優勝、二位がフラインボエ、三位がミョードーだった。

入賞したグループの踊りは素晴らしいものだったが、いっぽうで大変興味深かったのは、最近のカレン州情勢をそのまま反映しているとも言えるキワモノ的なグループがいくつか参加していたことである。以下に挙げるようなグループである。

DKBA の代表

DKBA というのは、「民主カイン仏教徒同盟」の略称で、反政府組織 KNU（カレン民族同盟）から 1994 年に分離した仏教徒主体の武装集団である。カレン人には全体としては仏教徒が多いのだが、KNU の中ではキリスト教徒が権力を持つという構図が続いていた。これに不満を持った一部の仏教徒

が KNU 幹部に反旗をひるがえし、ビルマ軍にくみして、KNU の総司令部があったマナプローを陥落させた。ビルマ政府の信頼を得た DKBA は、以降カレン州において我が物顔にふるまっている。当地のカレン人たちは、DKBA はならず者だと言い、仏教徒カレンでさえも彼らに不信感を抱いていることが少なくないように見える。

マインジューゲー門前町の代表

1994 年に仏教徒の一部が KNU から離脱する原因になった直接のきっかけは、マインジューゲー僧正という僧侶の信者たちがパゴダをタイ・ビルマ国境近くの丘の上に建てたことだった。これが軍事上の標的になることを恐れた KNU の幹部たちは、パゴダの取り壊しを仏教徒に命じた。ところが仏教徒たちはこの命令に従わなかったため、KNU の分裂という事態につながっていったのである。パアンから舟で北へサルウィン河を数時間さかのぼったところに、この僧侶の住む僧院がある。現在そこは門前町となってにぎわっている。

カルト集団「プータキー」の代表

1990 年代初頭、パアンに住む一人の青年が夢で啓示を受け、自分をプータキー（「伝統の維持者」の意）と呼んでカルト的集団を結成した。この信者たちは、ゾエカビン山という山のふもとで、カレンの伝統（と彼らが信じる）様式を守り、集団生活をしている。まわりのカレン人たちは少なからず気味悪く思っている様子である。この集団の信者たちは全員がカレン独特の鬘を結っている。ドン・ダンスの踊り子たちも鬘を結っており、踊りの振り付けも独特なので、コンテストでこの代表が踊ったときは、異様な雰囲気会場にただよった。この地域のカレンにはこのようなカルト集団が多い。他にもタラコンやレーケーなどの集団がある。

モンチャリー村の代表

パアンの郊外、ゾエカビン山のふもとに、キリスト教徒の住むモンチャリーという村がある。村の中は整然としていて、桃源郷的な雰囲気をただよわせる。ドン・ダンスには精霊信仰的な祈りの要素が部分的に組み込まれていることがあるため、ドン・ダンスを踊ることは、必ずしもカレン人キリスト教徒の信念にそぐわない。したがってキリスト教徒がドン・ダンスを踊ることは比較的少ないのだが、この年はモンチャリー村も代表を出した。

スゴー・カレン人村の代表

ドン・ダンスはもともとカレン州に住むポー・カレンの伝統舞踊である。そこで以前は、スゴー・カレンの人々が踊る場合も東部ポー・カレン語で歌っていた。ところがこの年はスゴー・カレンの村が二村、ドン・ダンスの代表を出し、どちらもスゴー・カレン語で歌った。スゴー・カレン語とポー・カレン語は音韻体系に大きな違いがあるので、スゴー・カレン語で歌うのとポー・カレン語で歌うのとでは、歌の聞こえ方も相当に違ってくる。最初にスゴー・カレン語で歌いはじめたとき、観客がどよめいていた。最近ではドン・ダンスがカレン人の文化的象徴とも見なされるようになってきたこともあって、このようにスゴー・カレン語（あるいは西部ポー・カレン語）の歌詞が用いられることもある。

ミャワディーの代表

タイとの国境に、ミャワディーという町がある。ここは以前、密貿易が盛んだったところである。KNU が弱体化してからここはタイ・ビルマ間の貿易の拠点となり、急速に発展してきた。現在ではムーイ川をはさんだタイ側の町メーソットとの間に橋がかかってにぎわっている。数キロ北には、かつて、難攻不落と言われた KNU の基地コムラがあった。また、メーソットの郊外には難民キャンプがあり、そこに行くビルマ国内の人権侵害の様子などをうかがい知ることができる。ミャワディーからはここ数年ずっとドン・ダンスの代表が出場している。ミャワディーの舞踊団について特筆すべきなのは、この舞踊団の構成員の大部分がビルマ人だということである。面白いことにビルマ人のドン・ダンスの踊り方はカレン人の踊り方と明らかに違う。ビルマ人が踊ると、どうしてもビルマ踊りのクセが出てしまうようであった。

カレン州記念日以外にも、カレン新年の催しなどでコンテストが行われることもある。ドン・ダンスの採点基準は多岐にわたる。踊りそのものの巧拙は当然として、振りや隊列に創意工夫はなされているか、歌詞の内容が良いか悪いか、衣装が美しいかどうか、全員の踊りがそろっているかどうか、鳴り物の演奏レベルが高いかどうか、などなど、総合的に採点される。そのためコンテストで入賞するのは相当難しい。

カレン州記念日のコンテストで優れた踊りを見せた踊り手は、2月12日の連邦記念日前後にヤンゴンで開かれる民族舞踊祭に、カレン州の代表として派遣される。従来、連邦記念日の民族舞踊祭は、ミャンマー中の諸民族の民族舞踊だけを連続して見られる魅力的な催しだったが、どういうわけか、最近は高い入場料を取って有名な流行歌手を出演させ、その合間に民族舞踊を見せるという形式に変わってしまった。各州から派遣される舞踊団も人数が減らされ、か

つては男女 16 人ずつの 32 人というドン・ダンス最大の編成が派遣されていたのに、今では全 24 人の小規模編成しか派遣できなくなったという。これについては、少数民族の結束を政府が恐れていることが一因になっているという噂が聞かれる。実は、カレン州記念日のコンテストも、私が行った次の年には、廃止こそされなかったが規模が大幅に縮小されたと聞いた。カレン人の友人によると、ビルマ政府はカレン州記念日のコンテストがカレン人の結束力を強める要因になることを恐れており、そのため政府からの圧力がかったというのである。

ドン・ダンスはもともとカレン州周辺のポー・カレン人が踊る民族舞踊だった。そのため歌詞も基本的には東部ポー・カレン語で歌われる。しかし最近では、このダンスがカレン人の文化的象徴とも見なされるようになってきたこともあって、スゴー・カレン人やイラワジ・デルタのポー・カレン人が、それぞれスゴー・カレン語や西部ポー・カレン語を用いて歌うこともある。



図 3 : カレン州記念日のドン・コンテストの様子。



図4：祭りでドンを踊る子供達。(カレン州パアン)



図5：連邦記念日の民族舞踊祭にむけてドンを練習するカレン州代表の人々。

ところで、ミャンマーではドン・ダンス以外にもカレン人の舞踊としてスゴー・カレンの人達が踊るバンブー・ダンスが比較的知られている。これは、音楽のリズムに合わせて打ちつけられる長い竹の棒の間を、竹に足を挟まれないように飛び跳ねながら踊るもので、アジア各地に類似のものが知られている。

ミャンマー国内ではカレン人のバンブー・ダンス以外に、一部地域のチン人の踊るバンブー・ダンスが有名である。

カレン州のポー・カレンの人々は、歌が上手なことでも知られる。カレンの伝統的な旋律に乗せて即興で歌を歌うことができる人も多い。歌を歌うときによく使われる伴奏楽器は、ビルマ語でメーダリンと呼ばれる楽器である。この楽器は6本の弦を張って爪弾く弦楽器で、西洋のマンドリンを、形態や奏法を変えてミャンマーの民族楽器として取り込んだものだと言われている。カレンには6本弦の豎琴もあり、これもしばしば歌の伴奏に使われる。弦が16本あって装飾も見事なビルマの豎琴に比べると素朴なものであるが、弦に針金を用いるため、絹糸を用いるビルマの豎琴とは違う独特の神秘的な音色が出る。この楽器はポー・カレンだけでなくスゴー・カレンも用いている。

カレン州パアン郊外出身のポー・カレン人歌手チョー・ライテインは、メーダリンの弾き語りの名手である。歌手としての活動だけではなく、劇団を率いてカレン州中を回っている。劇団員にはポー・カレンもスゴー・カレンもあり、ポー・カレンの村ではポー・カレン語で、スゴー・カレンの村ではスゴー・カレン語で劇を見せ、人々に喜ばれている。



図6：ヤンゴンで開かれたカレン新年の祭りでバンブー・ダンスを踊るスゴー・カレンの若者達。



図7：メーダリンの弾き語りをするポー・カレンの青年。(カレン州パアンで)



図8：カレンの豎琴を演奏するポー・カレンの男性。(タイ国メーソット郊外の難民キャンプで)



図 9 : 歌手チョー・ライテイン (右から二人目) と仲間達。(ヤンゴンのチャウタッチー・パゴダ近くのカレン人僧院にて)



図 10 : カレン州パアン郊外のポー・カレン村で興行を行うチョー・ライテインの演劇一座。

3. 祭り

カレン人の祭りとしてミャンマーで比較的知られているのは、カレン州のボ

ー・カレンの人々が行っているオーボエーという祭りである。オーボエーは若い男女が行うもので、かつては年頃の男女が知り合う格好の場として機能していたようである。オーボエーという呼び名はビルマ語 (ʔəbwé または ʔəbwé) で、東部ポー・カレン語ではチャインラン [chəʔàinlàn] と言う。

オーボエーは、大きく、男性が自分の肉体の健康さを女性に見せる前半部と、男女が歌で愛の駆け引きをする後半部の歌垣に分かれる。オーボエーを行う時期は特に決まっておらず、米の収穫のとき、パゴダ祭りのときなど様々な機会に、村の僧院の境内などで夜を徹して行われる。

前半部では、女性が二列になって向かい合って座っている間を、上半身裸になって腰布をたくしあげた格好の男性達が、自分の胸や腕をパシッパシッと叩きながら歩いていく催しが開かれる。このとき男性は、自分の身体の健康さを女性に誇示するのである。かつてはカレンの男性の多くが脚に入れ墨を彫っており、入れ墨がなければ女性の注目を集められなかったという。

後半部は歌垣であり、まず女性が一列にならんで座る。すると、男性が目当ての女性の前に行って、即興で女性の関心を惹くための歌を歌う。この時歌う歌は、比喻をふんだんに盛り込み、韻を踏んだ興味あふれるものでなければならぬ。男性の誘いの歌に対して女性は、やはり、興味あふれる美しい歌で返さなければならぬ。女性は歌を歌うときに顔をショールで隠す。男性も女性もこのやりとりの中で美しい言葉を操るための教養が試される。歌の一例として、ビルマ社会主義計画党が1967年に出した『少数民族の文化と伝統習慣 カレン』に掲載されているやりとりの最初の部分だけを下に引用しておく。原文は仏教ポー・カレン文字で書いてある(pp.148-149)。

男： láithêinphú thən ló chəjàin
トンビ 飛ぶ ~に 遠く
ʔè mwē mái kò nī thain
もし ~である 縁ある人 呼ぶ 寄せる 戻す

「トンビが遠くを飛んでいる。あなたと縁ある人なら、呼び戻したまえ」

女： láithêinphú thən chəphòphân
トンビ 飛ぶ 天空
ʔè mwē mái yê chōn làn
もし ~である 縁ある人 来る とまる 下りる

「トンビが天空を飛んでいる。私と縁ある人なら、下り来てとまれ」

カレン語の部分をよく見ると分かるように、韻を踏むなどの技巧がこらされて

いる。歌垣を行うこの後半部がオーボエーのクライマックスである。このような催しの合間に、食事がふるまわれたり、ドン・ダンスを踊ったり、歓談したりと、様々なことが行われる。

30年から40年ほど前まではこのオーボエーも頻繁に催されていた。最近では催される頻度がめっきり減ってしまい、パアンなどの都市に近い地域ではほとんど見られなくなってしまったという。



図11：オーボエーの前半部。『コートウーレー写真集』(p.92)から転載。



図12：オーボエーの後半部。『コートウーレー写真集』(p.94)から転載。

ビルマ暦の10月一日(グレゴリオ暦では12月末から1月の初め)はカレン新年として祝日に定められている。この時期、カレン人の多い地域では様々

な祭りが開かれる。ヤンゴンでもカレン人の新年祭がインセインにあるアーレインガーズィン・パゴダで毎年開かれている。ヤンゴンのカレン新年祭ではドン・ダンスのコンテストやボクシングの試合、カレンの伝統衣装のファッション・ショーなど、様々な催しが用意されている。私がミャンマーに留学中の90年代前半は、スゴー・カレンの脳外科医ソー・サイモンター氏(Saw Simon Tha)が実行委員長となって皆を取りまとめていた。場所や時期の点で、カレン人の祭りとしては外国人にとって観やすいものなので、機会があれば是非行ってみることをおすすめする。最大の見所はドン・ダンスのコンテストで、ヤンゴンに住むカレン人の舞踊団が次から次へと舞台に出ては踊りを競い合う。カレン州のものほどは踊りのレベルが高いとは言えないが、十分楽しめる。興味深いのは、踊り手や鳴り物の演奏者として、かなりの数のビルマ人のドン・ダンス愛好者が参加しているということである。カレンとビルマの関係は、非常に険悪なものとしてマスコミなどで報じられることもあるが、個人対個人のレベルでは決して仲が悪いわけではない。ビルマ人愛好者の存在は、カレンとビルマの関係の一側面を垣間見せてくれる。



図13：ヤンゴンで開かれたカレン新年の伝統衣装ファッションショー。写真の男女はスゴー・カレンの若者。

引用文献

ビルマ社会主義計画党編(1967) 『少数民族の文化と伝統習慣 カレン』(ビルマ語文。原題 tVng':rang':sa: yan~'kye:hmu_rV:raa_dha_le.thuM:caM_myaa:ka_rang')

ビルマ社会主義計画党編(1972) 『コートゥーレー写真集』(ビルマ語文。原題 ko'suu:le_dhaat'puM_hmat'tam':)

(大阪外国語大学 加藤昌彦)